

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎



明報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 http://www.higurashi.net/ 第0052号  
護國青年會議機関紙 http://www.gokoku.net/ 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成20年8月17日

# 静かなる 歳月を数えて 蝉の声・靖国特集号

## アジアを守った先人の崇高な理念

かつて我が先達は、八紘一宇という崇高な理念を掲げて大東亜戦争を戦い、アジアを欧米の魔手から守り抜いた。天の果て、地の果てに至るまで、この地球上に生存する全ての民族が、恰も一軒の家の中に住み、皆仲良く暮らせるようにと願う八紘一宇の帰着するところは、世界平和の実現であり、それは我々日本人が八百万の神々と約束した天命である。しかし、我が日本は、その天命を果たせぬまま先の大戦で一敗地に塗れた。夥しい人数の同胞が殺され、或いは生き別れとなり、豊かな自然を湛えた美しい国土は焦土と化し、国民が明日への希望を失いつつあった時、その胸に去来したものは、蒼空の果てに飛び立つた若者達の勇姿であった。

このままでは、祖国を、故郷を、そして愛する人を守るため散華なされた御英霊に顔向けができないと、我が先達は日本の復興に死力を尽くし、見事にそれを成し遂げた。あれから六十三年、今を生きる我々が繁栄と平和を享受していられるのは、日本国のために尊い命を捧げた御英霊と、復興に尽力した先達が、礎となつて決することを決して忘れてはならない。

皇紀二六六八年八月十五日、浮世の垢に塗れた六根を清浄せんと、頭から冷水を浴びてベランダに立つ。黎明の空にたなびく東雲を見やり、深く静かに頭を垂れて皇居を遥拝する。敗戦の痛手により疲弊した国民に生きる活力を与え給うた先帝陛下に感謝し、往時の生活を偲びながら恒例となつた水団を食すると、愈々出発の時は来た。地下鉄を降りて地上に出ると、待ち受けていたのは昨年同様、灼熱の太陽だつた。辺りの木々から聞こえる蝉の聲は道行く人々に何かを訴えているかのようだ。日本の近代史に例を見ない媚支那・媚南北朝鮮の政権ができてから間もなく一年になるが、九段の杜から聞こえてくる蝉しぐれは、まるで御英霊の嘆きを代弁しているかの如く胸に突き刺さつた。

は誰だ、福田首相の言う友達とは支那と南北朝鮮ではないか、貴様は何処の国の首相なんだ。我々が日本人として、この世に存在するのは不惜身命を實踐して散華された御英霊の方々のお蔭である。この一点は、如何なる国が何を言おうと、ましてや貴様の如きポン助の能書きによつて揺らぐことはない事実である。日本国の首相は、たとえ何があろうとも、這つても日本国民を代表して靖国神社に参拝し、御英霊に感謝と哀悼の誠を捧げるべきである。人としての情も持たない冷血漢には日本国内閣総理大臣を名乗る資格などある筈がない。



拝殿に向う長蛇の列

神門まで来ると拝殿へと向う人の群れは長蛇の列となつていた。流れ落ちる汗を拭きながら黙々と歩を進める人々

の中には親・子・孫の三代揃つて遙々新潟から参拝に馳せ参じた一家の姿があつた。白髪を綺麗にセットした老婦人のご尊父はビルマでマラリアにかかり命を落したという。彼女の傍らにはその手を確りと握り締める孫娘がいた。彼女は「もう戦争はごめんです。この子らに戦争の悲惨さを教えるだけでなく、此処に眠る人々のお蔭で今があるのよ」とも教えなければいけませんよ」と目を潤ませながら呟いた。

どうにか拝殿まで辿り着き神道の作法に則り参拝した。時間というには余りにも短い十数秒間であつたが、万感胸に去来するものがあつた。近隣諸国の圧力に屈した教科書には、これでもか、これでもかと言わんばかりに自虐的な文言が羅列する。明日を担う子どもたちに、このような自虐的な教育を施す国など世界中の何処を探しても存在しない。そもそも敗戦を終戦と書き換えてから日本の歴史教育は虚妄の上に時を刻んでできてしまつたのだ。

拝殿右横にはすでに多くの同士諸兄が集結していた。正午が近づくにつれて、境内を包んでいた静寂は新たな静寂へと変つていった。拝殿に設置されたスピーカーから首相の聲が流れている。「過ぎし

日の史実を未来に正しく伝えていくことこそ、多くの戦没者の思いに込める道であります。首相の戯言が虚しく境内にこだまする。支那や南北朝鮮により捏造された歴史をそのまま伝えることが「多くの戦没者の思いに込める道」だと言つのか、もしもそうならば、こんなポン助をリーダーとする日本人は世界一不幸な国民である。

首相は八月十五日に靖国神社に行くのかどうか尋ねられ「私の過去の行動をみてほしい」と述べている。参拝するにしてもしないにしても確固たる信念があれば救いだが軟弱な首相に信念などあるう筈はない。案の定コンニャク宰相は靖国に詣でることはなかった。北京で開催中のジェノサイド五輪の開会式には嬉々として参列したが、靖国神社に参拝して御英霊に額づくことはなかった。恩も礼節も弁えない貴様のような外道が、息をする場所さえ日本国内にはないということをお願いするが、正午の時報とともに拝殿周辺を埋め尽くした人々の動きがピタリと止まり心をひとつにして一分間の黙祷を捧げた。威儀を正すかのような異空間の中、蝉しぐれとともに御英霊の叫びが聞こえてくる。「日本をこんな節操のない国にしたのは誰だ。先代首相と、先々代首相は我々に会いに来てくれたが、昨年に続いて現首相はやって来なかった。

そんなに支那が恐いのか、そんなに朝鮮が恐いのか、腰抜け宰相の参拝などこちらから御免蒙る。六十有余年前、国家存亡の危機に我等は信念に基づき死出の旅へと赴いた。だが今は日本の窮状を眼前にしても、我等にはどうすることもできない。本日靖国を訪れた十五万六千人の



一行護國青年會議を奉る拝詞

憂国の志士達よ、どうか日本をまともな国に戻してくれ、どうか我等を安らかに眠らせてくれ。御英霊の声が届いたかのように真上から憤怒の形相で真夏の太陽が照りつける長く暑く、そして熱い一分間であった。静寂だけが時を刻む中、護國青年會議副議長・谷田部浩士氏

が拝詞を奉った。

「掛ケマクモ畏キ靖国神社ノ大御前ヲ拝ミ奉リテ恐ミ恐ミモ白サク 天皇ノ大御代ヲ手長ノ御代ノ敵御代ト堅磐ニ常磐ニ齊イ奉リ幸ヘ奉リ給イ天下四方ノ國民ニ至ルマデニ御英霊ノ廣キ厚キ恩頼ヲ彌遠永ニモ豪ヲシメ給イ家門高ク身健ニ世ノ為人ノ為ニ盡サシメ給ヘト恐ミ恐ミモ白ス」

穏やかだが凛とした谷田部氏の声は、井之上浄誓白皇社会長率いる一行の決意を奮い立たせた。現在、多くの国民が袋小路に追い込まれたような閉塞感を感じている。その閉塞感を打破し、日本を「まともな国」へ戻さなければならぬ。たとえどんなに時間がかかろうとも御英霊に安らかに眠ってもらうため必ず成し遂げねばならない。それが我々が唯一できる恩返しなのだから・・・本日、靖国を詣でた人や、故あつて参拝できなかった人が一丸となって、日本を「まともな国」へ戻そうと邁進すれば、御英霊の願いが現実となる日が来るだろう。実現にはさまざまな障害が想定されるが身を挺して成し遂げることが現代人の責務である。多くの日本人が、故郷で迎えたお盆で、帰ってきた御先祖の霊と触れ合い、癒され励まされたことと思う。我々の先祖霊が麗しき谷や長閑なせせらぎ、壮大な山々や木々に囲まれた湖に

舞い降り、子孫の繁栄と弥栄を願うように、靖国の杜においても、日本を決して忘れない御英霊が我々を導き、慰め、励ましてくれている。

長い間、日本を苛み続けている自虐史観から脱却し、日本を「まともな国」に戻すためパール判事の言葉を引用し、靖国特集号のペンを置くこととする。皇紀二六六八年八月十五日 編集人・戸出蒼流

日本人はこの裁判の正体を正しく批判し、彼らの戦時謀略にごまかされてはならぬ。日本が過去の戦争において、国際法上の罪を犯したという錯覚におちいることは、民族自尊の精神を失うことである。

自尊心と自国の名譽と誇りを失った民族は、強大国に迎合する卑屈な植民地民族に転落することになる。日本よ日本人よ連合国から与えられた「戦犯」の観念を頭から一掃せよ。

ラタ・ピノード・パール



我々は国旗を汎用し世界に冠たる国家の構築と民族の育成に邁進します。我々は国を愛する心と祖先を敬う心の涵養に努めます。